

スポーツ指導者による体罰を助長する保護者からの期待

Parents' Expectations that Facilitate Corporal Punishment by Coaches

上野 耕平¹

Ueno Kohei

概要

本研究では、児童・生徒を主な指導対象とする公認スポーツ指導者資格を有する指導者135名を対象として調査を実施し、これまでの体罰経験を明らかにした上で、スポーツ指導者による体罰を助長する保護者からの指導に対する期待及びプレッシャーについて明らかにすることを目的とした。

分析の結果、対象者の約33%にあたる45名の有資格指導者が過去5年間に暴力、暴言、威圧、しごき、セクハラのいずれかの体罰を行っていたこと、また体罰は減少しているものの体罰の種類の間で改善傾向に差が認められることが明らかになった。他方、保護者から期待されている指導内容としては、楽しさが最も高く、協力、体力技術、努力、礼儀、成績の順に全ての種類で期待が高かった。さらに、保護者から指導に対するプレッシャーを感じる指導内容としては、楽しさに関する指導を挙げる指導者がやや多かった。そして保護者からの指導に対する期待及びプレッシャーの内、礼儀に対する期待が指導者による威圧を用いた指導を助長することを示していた。

本研究の結果、スポーツ指導者による体罰は減少傾向にあるものの、まだ体罰に頼った指導が行われていること、そして指導者による体罰に保護者からの指導に対する期待という状況要因が関係していることを示す結果が得られた。今後は保護者を対象とした調査を通じて、実際に保護者が指導者に対して期待している指導内容について明らかにしていく。

キーワード：スポーツ指導者、保護者、体罰、不正のトライアングル、犯罪機会論

問題の所在

2013年に日本体育協会、日本オリンピック委員会ほかにより暴力行為根絶宣言が示されてから10年の歳月が流れた。文部科学省が発表している体罰の実態把握に関するデータに因れば、学校における体罰件数は2013年の6,721件から2022年の485件へと急激に減少し、体罰の場面となった状況においては、中学・高校の部活動はそれぞれ10%以上減少していることが確認できる。そしてこの間、2020年4月より改正児童福祉法及び改正児童虐待防止法が施行され、体罰禁止が学校教育の枠を超え子育て全般に広げられた。体罰総数の減少は、こうした法整備を中心とした手続きの厳格化や、マスコミ報道等を通じた体罰の実態に対する理解の広がりによるものと考えられるが、スポーツ場面における体罰に関するニュースが現在に至るまでなくなっていないこともまた周知の事実であろう。

上野(2021)は、法整備が進む現在にあっても体罰が残る現状に関して、場合によっては体罰の現場に居合わせ、スポーツ指導者による体罰を黙認する立場となる保護者らに対するアプローチが含まれていないことを指摘していた。なぜなら、上野(2020)による探索的調査において、指導者による体罰は他者から見えない密室ではなく、多くの場合保護者を中心とした他者が見守る状況において実施されていることを示す結果を得ていたからである。そして上野(2021)が公認スポーツ指導者資格を有する158名を対象として実施した調査においても、同様の結果を確認している。こうした現状からは、スポーツ指導者のみに体罰問題の責任を帰せるのではなく、体罰が行われる状況に注目した研究が必要であるとする上野による指摘を見逃すことはできない。

上野(2021)は、個人が不正行為に至る要因を説明した

1 香川大学教育学部

「不正のトライアングル (Albrecht, 2014)」を援用し、スポーツ指導者による体罰を助長する状況について検討している。その結果、Albrecht (2014) が不正に個人が手を染める要素として指摘した「認知されたプレッシャー」、「認知された機会」、「正当化」の3つの状況要因の内、「認知されたプレッシャー」及び「正当化」は、暴力、暴言、威圧、しごき、セクシャルハラスメント（以下、セクハラとする）の全ての体罰を助長すると解釈可能な結果が得られたとしている。ここでの認知されたプレッシャーとは、スポーツ指導場面において「体罰を行ってでも結果（勝利や能力の向上、人間形成ほか）を求めるプレッシャーを周囲から感じる」という質問に対する回答に基づき得点化したものであった。つまり、体罰を行ってでも結果を求めるOB等の関係者や保護者を中心とした他者から受けるプレッシャーが強いほど、暴力他の体罰を行っていたと解釈できる結果であった。しかし上野 (2021) による研究では、結果を求めるプレッシャーと体罰の関係については確認できたものの、実際にどのような結果を求める期待やプレッシャーが体罰に影響を及ぼすのかについては明らかになっていない。

一般に勝利や技能の向上に対する期待やプレッシャーが指導者に対して掛けられることは理解できる。それはスポーツ指導者資格を有する指導者は、指導する種目の競技経験を有する場合がほとんどであり、参加者を含めた周囲の人間は、競技能力の向上やそれに伴う好成績を期待すると予想されるからである。そして勝利に固執するあまり、体罰に至る場合があることはよく知られている。一方で、例えば挨拶や礼儀に対する指導は各種目の競技能力の向上には関係がなく、現場での挨拶や礼儀の指導方法に関して指導者講習会で指導されることはない。そうした状況にあるにもかかわらず、子どもの運動・スポーツ指導に求める内容として、挨拶や礼儀に対する期待は高いことから（ベネッセ教育研究開発センター，2009；スポーツ庁，2018）、指導者は自らの経験に基づく指導に頼ることになり、その一部に体罰を伴う指導が含まれる可能性がある。上述したように、保護者が運動・スポーツ指導に期待する内容は様々であり、具体的にどのような指導に対する保護者からの期待やプレッシャーが体罰に関係するのかについて明らかにすることは、体罰が行われない状況を解明する上で非常に重要である。

そこで本研究では、スポーツ指導者資格を有する指導者による体罰の現状を確認すると共に、指導者が保護者から受ける期待及びプレッシャーに注目し、それらが体罰に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

方法

1) 調査対象者

A・B県で開催されたスポーツ指導者研修会に参加した

指導者299名に対して調査への協力を依頼した。その上で、得られたデータから成人のみを指導対象とする34名の指導者を除外し、中高生以下の児童・生徒を指導対象とするスポーツ指導者135名（平均指導経験年数：17.18年）の回答を分析に用いた。指導者らが主として指導している種目は、陸上競技、セーリング、ソフトボール、ボクシングなど多岐にわたっていた。なお本研修会は、日本スポーツ協会公認スポーツ指導者のさらなる資質向上と活動促進及び、指導者の連帯感を深め組織的活用を図ることを目的として、日本スポーツ協会及びA・B県スポーツ協会によって開催されたものであった。本研修会と同様の研修会は全国各地で開催されており、それらの受講は日本スポーツ協会公認スポーツ指導者資格の更新に必要な要件とされている。従って、本研修会の受講者も原則として資格の更新を希望する日本スポーツ協会公認スポーツ指導者であった。

2) 手続き

下記の質問から構成される調査用紙を作成した上で、研修会開始前の時間を利用して配布・実施された。また調査への回答は義務ではなく途中でも辞められることを口頭で説明した。調査は無記名で行われた。

3) 調査内容

本調査はスポーツ指導者の体罰経験及び参加者の保護者から指導に対して受ける期待及びプレッシャーについて調査することを目的として実施された。調査は、1) 過去5年以内の体罰経験、2) 保護者からの指導に対する期待及びプレッシャーについての質問、から構成された。なお分析対象となった指導者の内40名については、保護者からの指導に対するプレッシャーについての質問を含めていなかったことから、そのデータは得られていない。

過去5年以内の体罰経験 上野 (2020) を参考に、体罰が問題視されることのなかった過去ではなく、比較的記憶が残る過去5年以内の体罰経験の頻度について質問した。2013年には暴力行為根絶宣言が日本体育協会、日本オリンピック委員会ほかにより示されていることから、本調査結果は、体罰は根絶すべきであるという方針が公認スポーツ指導者の間に十分広まっている状況における体罰経験を表していると考えられる。なお、上述した暴力行為根絶宣言をもとに作成された運動部活動ガイドライン（文部科学省，2013）において体罰として考えられている、「暴力」、「暴言」、「威圧」、「しごき」、「セクハラ」を質問項目として用いた。各項目への回答は1)「まったくない」から4)「よく行った」までの4件法により実施し、分析に応じて、順序尺度として各カテゴリーの実数を集計する方法か、間隔尺度とみなし各項目への回答を得点として用いる方法を選択した。

保護者からの指導に対する期待及びプレッシャーについての質問 先述したとおり上野 (2021) は、体罰の種類に関わらず「認知されたプレッシャー」と「正当化」の2つ

の要因は指導者による体罰経験に対して影響を及ぼすことを明らかにしている。本研究ではその内、保護者からの指導に対する期待及びプレッシャーの内容について確認することにした。

スポーツ庁（2018）は運動部活動に関する実態調査報告書において、保護者を対象として部活動への期待について調査した結果について報告している。そこでは、校種や性別によってやや異なるものの、「チームワーク、協調性、共感を味わう」、「社会性（挨拶・礼儀等）を身に付ける」、「体力・技術の向上」、「友達と仲良く活動する」、「自信をつける」、「大会・コンクール等で良い成績を収める」などに対する期待が上位に位置づけられていた。また、ベネッセ教育研究開発センター（2009）が3歳から高校2年生までの子どもを持つ母親を対象として実施した調査では、学校外でのスポーツ活動に対して期待することとして「丈夫で健康な身体になる」、「自分の目標に向かって努力をする」、「人に対する礼儀やマナーを覚える」、「身体を動かすことを楽しむ」、「仲間と協力する姿勢を身に付ける」の5つが上位に挙げられていた。以上の調査結果に基づき、本

研究では「こどもが大会等で良い成績を収めること（以下、成績とする）」、「こどもが挨拶や礼儀を学ぶこと（以下、礼儀とする）」、「こどもが友達と楽しく活動すること（以下、楽しさとする）」、「こどもの体力や技術が向上すること（以下、体力技術とする）」、「こどもが努力や我慢を学ぶこと（以下、努力とする）」、「こどもが協力やチームワークを学ぶこと（以下、協力とする）」の6つの側面を取り上げ、保護者が指導に対して期待していること及び、保護者から指導に対するプレッシャーを感じることで、それぞれ質問した。各項目への回答は1)「まったくあてはまらない」から4)「よくあてはまる」までの4件法により実施し、分析には各項目への回答を得点としてそのまま用いた。

結果

1) 指導者の体罰経験

指導者の体罰経験に関する回答結果を図1、図2に示した。過去5年間に暴力、暴言、威圧、しごき、セクハラの内いずれかの体罰を行った経験が少しでもあった指導者は45

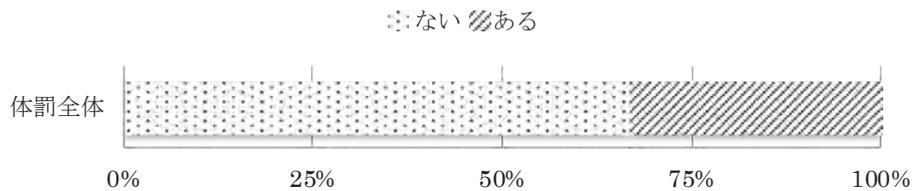


図1 過去5年間のスポーツ指導者による体罰経験

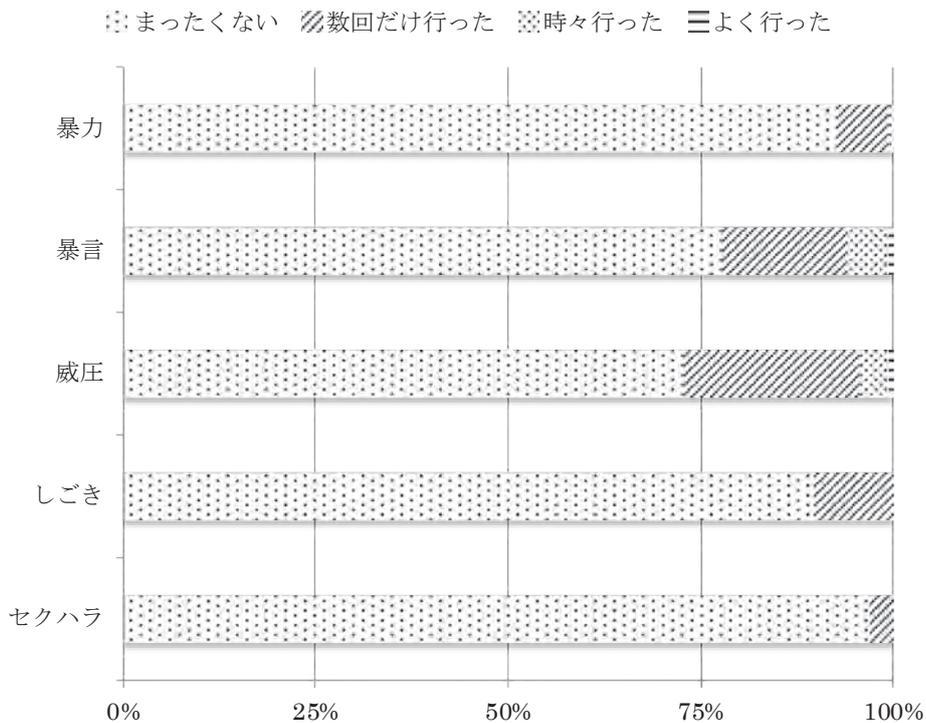


図2 過去5年間のスポーツ指導者による体罰の項目別の経験

表1 分析に用いた各変数の相関係数と平均値及び標準偏差

	1	2	3	4	5	6	7	Mean	SD
1. 暴力	—							1.08	.30
2. 暴言	.37***	—						1.29	.60
3. 威圧	.36***	.69***	—					1.33	.58
4. しごき	.31***	.49***	.44***	—				1.10	.31
5. セクハラ	.24**	.21*	.28**	.37***	—			1.03	.17
6. 成績 (期待)	-.02	.08	.06	.09	-.08	—		2.87	.80
7. 礼儀 (期待)	.10	.10	.17	.11	-.04	.35***	—	3.18	.76
8. 楽しさ (期待)	.09	.06	.14	.04	.02	.12	.52***	3.43	.65
9. 体力技術 (期待)	.04	.04	.09	.09	.00	.37***	.53***	3.26	.65
10. 努力 (期待)	.08	.10	.10	.13	-.06	.29***	.69***	3.24	.69
11. 協力 (期待)	.08	.05	.03	.12	-.02	.15	.70***	3.33	.69
12. 成績 (プレッシャー)	-.13	.04	.03	-.14	-.13	.43***	.04	2.31	.91
13. 礼儀 (プレッシャー)	.06	.03	-.04	-.13	-.05	.10	.31**	2.30	.96
14. 楽しさ (プレッシャー)	.13	.05	.05	-.11	.07	.15	.19	2.53	.99
15. 体力技術 (プレッシャー)	.05	.01	.02	-.09	.01	.29**	.14	2.45	.94
16. 努力 (プレッシャー)	.18	.10	.04	.02	.02	.20	.29**	2.37	.96
17. 協力 (プレッシャー)	.16	.02	-.07	-.08	.01	.18	.31**	2.43	.99

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
8. 楽しさ (期待)	—									
9. 体力技術 (期待)	.42***	—								
10. 努力 (期待)	.50***	.70***	—							
11. 協力 (期待)	.56***	.64***	.74***	—						
12. 成績 (プレッシャー)	.05	.16	.07	.00	—					
13. 礼儀 (プレッシャー)	.19	.19	.24*	.24*	.57***	—				
14. 楽しさ (プレッシャー)	.30**	.23*	.18	.20*	.61***	.76***	—			
15. 体力技術 (プレッシャー)	.17	.33**	.19	.16	.65***	.69***	.82***	—		
16. 努力 (プレッシャー)	.20	.27**	.39***	.26*	.49***	.81***	.76***	.75***	—	
17. 協力 (プレッシャー)	.24*	.26*	.29**	.32**	.50***	.85***	.82***	.80***	.89***	—

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

名 (33.33%)、一度も行った経験のない指導者は90名 (66.67%) であった。体罰の項目別の結果をもとに「まったくない」と回答した指導者を抽出したところ、暴力125名 (92.59%)、暴言105名 (77.78%)、威圧98名 (72.59%)、しごき121名 (89.63%)、セクハラ131名 (97.04%) となり、身体的な危害を伴わない体罰である暴言と威圧において、まったく経験がないと回答する指導者の割合がその他の体罰よりも少ないことを示す結果が得られた。

2) 保護者からの指導に対する期待及びプレッシャー

指導者が保護者から受ける指導に対する期待及びプレッシャーに関する回答結果を表1に示した。保護者から期待されている指導内容としては、楽しさが最も高く、協力、

体力技術、努力、礼儀、成績の順であった。成績を除き平均値はいずれも3点を超えており、多くの保護者が6つの側面全てに対して期待していると考えられた。他方、保護者から指導に対するプレッシャーを感じる指導内容としては、楽しさが最も高く、体力技術、協力、努力、成績、礼儀の順であった。楽しさを除いて平均値は全て2.5点を下回っており、子どもが楽しいと感じる指導であって欲しいというプレッシャーを保護者から感じるとする指導者がやや多いことを示す結果であった。

3) 保護者からの指導に対する期待及びプレッシャーが体罰経験に及ぼす影響

指導者が保護者から受ける期待(成績, 礼儀, 楽しさ, 体力技術, 努力, 協力)を予測変数, 体罰経験(暴力, 暴言, 威圧, しごき, セクハラ)をそれぞれ目的変数として重回帰分析(増加法)を行った。本分析に用いた各変数の相関係数, 平均値及び標準偏差は表1に示すとおりである。分析の結果, 威圧においてのみ重回帰モデルは有意($F(1,133)=4.00$, $adjR^2=.02$, $p<.05$)であり, 礼儀に対して保護者から指導を期待されていると感じている指導者ほど, 威圧を用いた経験があることを示す結果が得られた($\beta=.17$, $p<.05$)。一方で, 指導者による暴力, 暴言, しごき, セクハラを助長する保護者から受ける期待は認められなかった。

また, 指導者が保護者から受けるプレッシャー(成績, 礼儀, 楽しさ, 体力技術, 努力, 協力)を予測変数, 体罰経験(暴力, 暴言, 威圧, しごき, セクハラ)をそれぞれ目的変数として重回帰分析(増加法)を行った。本分析に用いた各変数の相関係数, 平均値及び標準偏差は表1に示すとおりである。分析の結果, 全ての体罰において重回帰モデルは有意ではなく, 保護者からのプレッシャーが指導者による体罰を助長したことを示す結果は得られなかった。

考察

1) スポーツ指導者による体罰の現状

スポーツ指導者の体罰経験に関する回答結果から, 調査対象となった135名の内, 過去5年間に何らかの体罰を行ったことがある指導者は全体の約33%にあたる45名であった。本比率は約2年前に上野(2021)が本研究と同じ調査を実施して報告した際の比率(約45%)から大きく改善されていた。特に, 体罰の項目別の結果をもとに「まったくない」と回答した指導者を抽出した結果から, 暴力は134名(84.81%)から125名(92.59%)へ, 暴言に至っては97名(61.39%)から105名(77.78%)へと大きな改善が認められた。近年では, 暴力のみならず, 指導者から浴びせられる暴言についても大きく取り上げられるようになってきている。亀井・岡本(2021)は高校運動部活動に参加していた大学生を対象とした調査の結果, 暴言は暴力よりも日常的に行われている体罰であることを明らかにし, 暴言への対処の必要性を主張している。こうした暴言に対する注目の高まりにより, 暴言を働く指導者の比率が他の体罰よりも比較的大きく減少したのではないかと考えられた。

一方で, 威圧については「まったくない」と回答した指導者は110名(69.62%)から98名(72.59%)へとわずか3%程度の減少に止まっていた。本研究では威圧の具体例として「すごむ, 物を投げるなど言葉や態度による威嚇・おどし」と例示しており, 例えば壁を叩く, 大声で怒鳴るなど

して, 活動に参加する児童や生徒の気持ちや行動の修正を迫る方略を指している。威圧は暴力のように身体に何らかの直接的なダメージを与える体罰でもなく, 暴言のように参加者の尊厳を貶める体罰でもないことから, 代替的な手段として暴力や暴言が威圧に形を変えて残存している可能性がある。他方, 本調査は体罰に関する調査として回答しにくい項目が並ぶなかで, 暴力や暴言, セクハラなどとの比較において事実を回答しやすい体罰として威圧が選ばれた可能性もある。指導者本人を対象として体罰経験を問う本調査の限界であるとも考えられるが, 本調査結果において体罰の種類の間で改善傾向に差が認められた理由や, そのなかで威圧が体罰として残存している理由について, 今後多方面から検討していく必要がある。

2) 保護者から受けている期待及びプレッシャーに対する指導者の認識

保護者から受ける指導に対する期待として指導者が最も認識しているのは楽しさに対する期待であった。そしてそれだけでなく, 保護者から受けるプレッシャーとして認識している指導も楽しさに対するプレッシャーであった。このことは実際に指導者が楽しさ以外の指導に注力するあまり, 保護者から楽しさに対する指導を重視するよう要請されるような状況があった可能性を示している。

本調査の調査項目を選定する過程で参考にしたスポーツ庁(2018)及び, ベネッセ教育研究開発センター(2009)が保護者を対象として行った調査結果は, 協力や礼儀, 体力など, 言わば運動・スポーツに認められる手段的価値に対する指導への期待が高く, 楽しさについてはそれらの次に位置づけられることを示していた。楽しさの指導に対する期待も高い水準にあることから特に問題であるとまでは考えられないが, 保護者は楽しさに対する指導よりも, 参加者の人間的成長を促すような指導を求める傾向にあると考えられる。このような状況にあるにも関わらず, 保護者から楽しさに対する指導へのプレッシャーを感じたとするならば, 指導者が楽しさ以外の指導に対して保護者の期待を超えて取り組んだ可能性が窺われる。スポーツの楽しさについては, スポーツ少年団の指導者を対象とした講習会においてもスポーツ指導者に求められる心構えとして示され, スポーツ指導者が自らモデルとなってその楽しさを表現するよう期待されている(日本スポーツ協会ほか, 2019)。それは往々にして, 試合に勝つことのみを考えて, プレーヤーに自分の理想や考え方を押しつけてきた指導に対する反省があるからである(清水, 2019)。上野(2020)は調査対象者数(44名)が少なく限定的な結果であるとしつつも, 楽しさ重視の指導が暴力や暴言といった体罰を抑制する関係にあること, 勝利を重視する指導が威圧や体罰を助長する関係にあることを明らかにしている。本研究の結果は, 全体として体罰が減少し望ましい指導が行われるようになってきていることを示している半面, 実際に

は保護者から協力や礼儀、体力ほか、様々な指導が求められるなか、楽しさを大事にした指導がなおざりにされた可能性があるなど、体罰に結びつきやすい状況が指導現場にある可能性を示していると考えられた。

3) 保護者から受けている期待及びプレッシャーと体罰の関係

保護者から受けている期待及びプレッシャーと体罰経験についての重回帰分析の結果は、保護者から受ける礼儀に対する期待が指導者の威圧を助長する可能性があることを示していた。そもそも本研究は上野（2021）による調査結果を受け、指導者の体罰経験に対して影響を及ぼす保護者からのプレッシャーを、体罰の種類別に明らかにすることを目的としていた。そして指導者によって認知されるプレッシャーとしては、保護者から受ける期待よりもプレッシャーの方が指導者の体罰経験を助長すると考えられた。しかし実際には、本研究は一時点の調査研究であることから、「実際にプレッシャーを受けて、既に指導者が体罰を抑制している場合」が調査結果には含まれている。従って本研究においては、保護者からの指導に対するプレッシャーと各体罰経験の間に関係が認められなかったのではないかと考えられた。

他方、保護者からの礼儀に対する期待が指導者の威圧を助長する関係にあったことは、本研究の仮説に合致する結果であり、指導者によって認知された保護者からのプレッシャーと体罰の関係を示していた。体罰が行われる背景には指導者個人の問題も含まれている。従って、これまでもスポーツ指導者が体罰に至る心理的メカニズムの解明に向けた研究の必要性についても指摘してきたが（上野, 2020）、本研究結果はやはりそれだけでは不十分であり、児童・生徒を体罰から守るためには、指導者の性格傾向や思想信条に関わらず、体罰が行われにくい状況を解明する必要性を示している。

学齢期における運動・スポーツ経験が彼らの人間的な成長を促す経験となることを保護者が期待することは、我が国においてスポーツ活動が教育の手段として普及した背景（玉木, 2003）や、スポーツ経験のある保護者による経験的事実からすれば、一面では致し方ないとも考えられる。また本来であれば家庭で行うべき教育を学校や地域のスポーツ活動に委ねている現状もあろう。しかし本結果は、そうした保護者からの礼儀の指導に対する期待が指導者の威圧を用いた指導を助長することを示しており、結果的にはあるが、保護者自身が体罰を助長する状況を生み出す要因の一つとなる可能性も示している。武道以外では、礼儀に対する指導は本質的にその運動やスポーツの内容とは関係がないことから、指導者としての総合的な力量が問われる指導内容であるとも考えられる。そうした容易ではない指導を指導者のみに担わせる状況が指導現場にあるとすれば、本研究の結果はまさに指導者に多くを求める状況が

もたらす結果を表していたと言えるであろう。本研究は指導者を対象とした研究であったことから、実際に保護者がどのような指導を期待しているのかについては不明確である。今後保護者を対象とした調査結果を併せることにより、体罰を助長する状況要因についてさらに詳しく検討する必要があると考えられた。

まとめ

本研究では、児童・生徒を主な指導対象とする公認スポーツ指導者資格を有する指導者135名を対象として調査を実施し、これまでの体罰経験を明らかにした上で、スポーツ指導者による体罰を助長する保護者からの指導に対する期待及びプレッシャーについて明らかにすることを目的とした。

分析の結果、対象者の約33%にあたる45名の有資格指導者が過去5年間に暴力、暴言、威圧、しごき、セクハラのいずれかの体罰を行っていたこと、また体罰は減少しているものの体罰の種類の間で改善傾向に差が認められることが明らかになった。他方、保護者から期待されている指導内容としては、楽しさが最も高く、協力、体力技術、努力、礼儀、成績の順に全ての種類で期待が高かった。さらに、保護者から指導に対するプレッシャーを感じる指導内容としては、楽しさに関する指導を挙げる指導者がやや多かった。そして保護者からの指導に対する期待及びプレッシャーの内、礼儀に対する期待が指導者による威圧を用いた指導を助長することを示していた。

本研究の結果、スポーツ指導者による体罰は減少傾向にあるものの、まだ体罰に頼った指導が行われていること、そして指導者による体罰に保護者からの指導に対する期待という状況要因が関係していることを示す結果が得られた。今後は保護者を対象とした調査を通じて、実際に保護者が指導者に対して期待している指導内容について明らかにしていく。またスポーツ指導者による体罰を助長する状況要因として残されている「正当化」についても、今後その影響について検討していく。

付記

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究 C、課題番号：21K11551、研究代表者：上野耕平）の助成を受けて行われました。

文献

- Albrecht, W. S. (2014) Iconic fraud triangle endures: Metaphor diagram helps everybody understand fraud. *Fraud Magazine*, July/August: 1-7.
- ベネッセ教育研究開発センター (2009) 子どものスポーツ・芸術・学習活動データブック. <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=3265> (参照日：2023年5月30日)

亀井誠生・岡本直輝（2021）高等学校運動部活動中の指導場面における暴言について. 運動とスポーツの科学, 27（1）：23-35.

文部科学省（2013）運動部活動での指導のガイドライン. http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/1406072.htm（参照日：2019年11月28日）

日本スポーツ協会・佐々木秀幸・勝田隆・清水隆一・友添秀則（2019）スポーツ指導者とは. 日本スポーツ協会日本スポーツ少年団編 スポーツリーダー兼スポーツ少年団認定員養成テキスト, pp.34-39.

清水隆一（2019）指導者の心構え・視点. 日本スポーツ協会日本スポーツ少年団編 スポーツリーダー兼スポーツ少年団認定員養成テキスト, pp.43-48.

スポーツ庁（2018）平成29年度運動部活動等に関する実態調査報告書. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/1406073.htm（参照日：2023年5月30日）

玉木正之（2003）スポーツ解体新書. 日本放送出版協会.

上野耕平（2020）スポーツ少年団における体罰に関する探索的研究——不正のトライアングルに基づく考察——. 香川大学教育学部研究報告, 2：103-112.

上野耕平（2021）スポーツ指導者による体罰を助長する状況要因. 香川大学教育学部研究報告, 5：21-27.